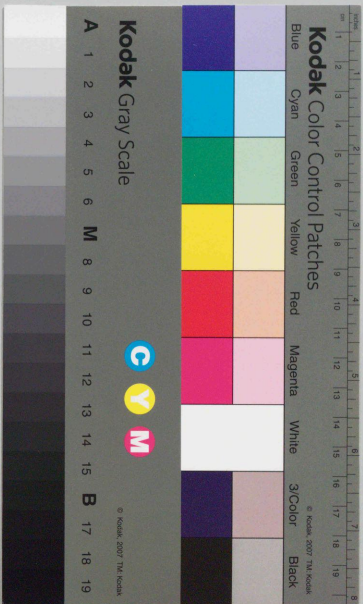


改正三河後風土記

六

昔々集

第 四
第 六
210
ナ
I-6A



改正三河後風土記卷第六

目錄

- 一 阿倍大翁被免自三州井田郷古戰之事
- 一 内膳心儀定計自他千代君發州以還之事
- 一 阿倍郡兵馬靈夢之事
- 一 阿倍大翁催促地方自廣忠君駿州御下向之事
- 一 廣忠君三州牟呂御入城自吉良西條發
- 一 英信定要盟之事



A210
1-6A

廣忠君同攻此城之事

內膳正隆之事

織田信秀安祥城賣九馬物長而宛

之事

竹千代君即誕生自即君即離別之事

竹千代君即兄弟自即君即離別之事

廣忠君即與離自即八日之事

酒井將監忠尚互送自即人信孝改易

之事

三州清繩自英海理河原軍之事

寬平三市利叙松平三馬忠偏之事

竹千代君人質之事

三州小豆坂軍之事

三州明大寺村合戰自即人信孝討死之事

山中宗城之事

廣忠君即去自即安祥而傳軍英信信

人質誓之事

改正之河猿風土記卷第六

阿倍大藏部免日之洲井田郷公親之章

贈大納言廣忠卿所切名は免之次君後小
次郎之部君と稱し治之次新派君免日之洲大納
六年丙戌四月廿九日所誕生所母は
音千能能海子貞之京の女なり所父は
源次郎恒康と云其次は大樹と茅十四世
成卷之人又所母は長治の松平上野介
政忠之室なり後之は源井十郎所
忠次之嫁治之次之治康君之孫也
吾山一居たる所誕生阿倍大藏部免日

生擒し、三州を備へ、清康君乃遺文
道圓入道殿を中より、所隠居を、おと
くまは、此所を中より、道圓入道殿の位
あつは、大氣よ、おし、ハ、苦く、運意を存す
つ、其上、活七、死體を、密換する、所、ハ、
大氣、陳謝の状、并、起、注、文、以、於、上、ハ、
逆心、なり、此事、必定、なり、無、を、活七、不、急、
清康を、弑、す、その、大氣、之、罪、ハ、免、
備、ハ、活七、率、尔、ち、其、ハ、大氣、を、ハ、赦、免、
す、一、活七、代、ハ、は、一、清康、の、時、誓、
忠節、を、正、す、一、と、任、り、一、ハ、大氣

虎口の難を遁り、益忠義を思ひ、三州
屋邊、之、頃、も、藏、因、平、之、忠、任、承、ハ、清康、君、
横死、を、お、し、時、を、増、き、う、と、恨、い、勇、み、
此、弊、を、お、し、て、是、等、を、改、正、一、と、天文
五年、丙申、二、月、始、八、千、余、の、軍、留、を、三、州、小
谷、向、く、大、櫓、を、表、々、陣、を、九

徳川の所、善代元、此事、を、お、し、う、ち、お、し、
清康君、所、題、を、お、し、う、ち、す、す、名、將、の、百、願、
ち、く、と、款、の、馬、蹄、よ、か、け、く、其、役、を、捨、
お、し、ん、や、仙、文、代、殿、は、中、切、お、し、ん、
清康君、の、所、題、を、お、し、う、ち、お、し、

海世は足代殿山石代と一軍
すくいと三木の願と松平新入佐者共
合才精敵の形と十部一節唐者と勇
永之其勢儘又八百金騎 是勢と打之
十四四押也 家々々 勢我二二二
井田郷と陣と死滅回方定と是とん
敵は儘の小録とて 駆散してすくと
敵を侮ると也 是は備とす 軍使
定し思ひくは 就拂と無く 殉死せん
海也 是勢也 是は 守討死と 思
各妻子の死を欲く 體の神と振切とす

此時亦多吉ら忠盡る 子平八節 忠を
志せり けて 武勇 戦後陣の 軍勢
是を 是く 亦多 討す 始者 是と 是く
是を 是く 亦多 討す 始者 是と 是く
林菴 助光 攻つ 子菴 是 是 大原 石 是 是
惟宗 其 可 榎 付 是 是 力 出 我 者 是 是
是 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是
大軍 小 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是
旋風 的 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是
小勢 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是
是 是 是 是 是 是 是 是 是 是

程は幾い、余りも多勢、攻らむと
 有程左様不遂を待先陣、既又破れぬ六
 二陣、三陣、さす、一々、反崩せ、一々
 逃け、我少く是を討、討死、首を
 計、百六拾余級、負れ、敢は、知事、さ
 ち、湖、四方、軍勢、は、一、戦、小、利、を、得、ひ
 尾、港、の、固、り、く、逃、帰、得、居、苦、一、切、々、
 の、得、せ、り、さ、事、と、是、時、方、も、為、一、と、さ、一、
 孝、林、後、翁、長、政、極、村、新、六、節、言、方、論、中、
 重、由、其、子、新、三、節、安、長、と、始、随、一、の、勇、士
 一、拾、一、討、死、す、今、首、城、一、得、来、り、一、者

昔は若君と見、注おせは、若君も昔
 論を流、一、の、中、漢、成、元、は、他、代、若、卿
 家、始、の、合、戦、は、大、軍、は、打、勝、一、は、中、
 物、始、一、と、恨、ひ、け、り、井、西、合、戦、一、は、
 必、討、の、事、一、と、し、
大藏院家忠見記去條記云は討死
八幡の倉屋井西の方一百人中、乞又
件如、備の事、白羽の矢、射、る、
両、方、に、射、り、と、射、り、

按、す、武、徳、大、成、記、大、系、其、子、の
 大、軍、を、中、一、大、に、馬、に、上、り、色、事、等、時、
 一、回、り、は、藤、原、君、は、山、に、上、り、討、死、す、
 只、今、一、歌、大、勢、寄、事、一、一、此、疏、據、小
 著、者、を、一、と、示、し、あ、ら、せ、ん、事、一、然、一、と、し、

道園入道殿の山言、姑輩をさげり、
各々一語、不日入道殿位を受くを
用ゑ、一語、不日入道殿位を受くを
川つゝ、定吉信法す、一と仰、山言、
一人も且せぬ大氣一人、若君と信の信、
新と記、是亦文の誤と大よき是、河信
入道、松平記にも河信、家系、定吉、
見大氣の事、子因、是等、入道、事、
と、及、事、と、合、せ、る、事、は、大、成、記、に、河、信
新、や、実、せ、ん、。

内膳正信定吉中、自他、代、若、勢、州

河三、世、之、事、

今、自、他、千、代、若、は、河、信、若、の、所、家、若、と
繼、世、信、の、是、等、も、中、在、信、河、一、行、一、後
所、家、人、の、も、昔、又、勢、の、志、と、初、一、止、信
一、若、若、河、成、人、を、侍、初、は、河、信、若、の、山、言、又
橋、井、の、願、主、以、平、内、膳、正、信、は、河、信、若、の
所、侍、り、一、行、一、其、志、を、翻、一、河、三、河、若、
一、味、一、河、三、河、と、改、り、西、三、河、を、押、領、せ、ん、と
由、一、思、今、一、思、し、も、一、河、信、若、若、乃、
所、横、死、を、揚、若、一、公、事、と、も、河、三、河、方、井、河、
合、裁、乃、後、は、是、等、一、及、裁、也、事、也、一

新くは教へし。免角老父道園入道學
教他文代君と和睦し。吾後計畧を回し
是所を奪ふんと云ひ入道殿。中々は
我亦清康と不和の交はし。及父治
去享祿三年。字理地事乃時親盛
入して款小周を討死せし。を信定不覺
し。捨殺したり。清康元人の中々
我を和むた。不覺の事。何れも
叙死の事。何れもは。い。新死奪我
吾のき師。羅布。紀を。我。是を
恨み心。何れも。御田家。若。隆。一。を。

然れ今他千代は。恨む。味。和睦
家園の後見仕。一。只。何れも。何れも
御免。何れも。生。世。の。何れも。
他。本。と。不。使。より。父。君。道。勸。亂。成
衆。の。更。是。よ。是。を。熱。頭。せ。し。種。く。致
け。入。道。殿。も。始。乃。終。は。少。川。せ。り。し。
其。後。も。熱。頭。夜。重。く。事。を。は。流。石。忍。電
に。も。哀。と。也。思。ひ。の。い。ん。人。治。事。を
拓。き。宮。い。は。是。長。内。膳。先。非。を。悔
仙。千。代。と。和。睦。し。と。後。見。せ。んと。致。す。は
い。く。何れも。と。身。の。一。治。事。ハ。斯。と。せ。し。

真すは勇士の如きなり。海を帷帳の
中より四一胸事を千里の外より
仙子女の如き物として帰せしむ
形母安中(さし)今もは大翁も大に悦
懽家(さ)して帰るなり

阿倍郡三津霊の事

阿倍大翁定吉は豫列より掛家(帰)り
切着と豫(向)へ健ひしとせんといふ
用をせり。室は大翁の弟三津定次は
見し志を回くし。切着れ即ち小津の
妻とせり。可(通)り極くは心我(心)

今(今)を極(極)めし(今)切着(切着)は油濁(油濁)西(西)岸(岸)
七社(七社)控(控)境(境)は宿(宿)野(野)の事(事)なり(なり)と(と)云(云)ふ(ふ)也(也)
中(中)て彼(彼)社(社)小(小)津(津)治(治)守(守)是(是)は(は)社(社)一(一)日(日)に
七(七)百(百)九(九)十(十)日(日)忌(忌)を(を)置(置)く(く)ハ(ハ)法(法)新(新)造(造)丁(丁)と(と)云(云)ふ(ふ)
世(世)に(に)よ(よ)り(り)傳(傳)へ(へ)る(る)は(は)九(九)十(十)日(日)社(社)未(未)く(く)と(と)云(云)ふ(ふ)也(也)
是(是)故(故)即(即)佛(佛)地(地)の(の)事(事)を(を)祈(祈)念(念)す(す)又(又)心(心)月(月)留(留)
より(より)は(は)社(社)更(更)法(法)方(方)社(社)に(に)祈(祈)念(念)す(す)と(と)云(云)ふ(ふ)也(也)
一心(一心)は(は)祈(祈)を(を)す(す)其(其)月(月)晦(晦)日(日)は(は)松(松)平(平)部(部)
佐(佐)勝(勝)部(部)氏(氏)代(代)禰(禰)を(を)奉(奉)祀(祀)す(す)と(と)云(云)ふ(ふ)也(也)
人(人)に(に)回(回)り(り)て(て)文(文)武(武)送(送)り(り)て(て)其(其)夜(夜)は(は)
阿(阿)部(部)三(三)津(津)定(定)吉(吉)の(の)海(海)願(願)なり(なり)と(と)云(云)ふ(ふ)也(也)

一点の靈を城敷のくそを不思得也
可は三州大榎寺佛殿の心柱端と光
一きよ土色の小帽子を共敷土掛を
以て佛殿に唐戸開くと云ふ事は
其丈二尺さうりの神童三人の形を以て
掛垂帳を一つと云ふ連枝の形を
以て白例と群集する人々其形を以て
堂の左側には松平内膳正位三從者共定
具と見物と居き共射平准
新三束八指現七社の神使と稱し以て
以平と右の肩より其左のより判形と

き此札本を於東海郡三束は右の座敷
只一人の形を以て居きると云ふ其
神使平と札本を以て是と三州殿
授中一と云ふは常三束神使の
左の持札本を右の持きると云ふ束れ方
座の座敷長サ二人は凡そ異し真知の
丸紐を以て以て以て以て以て以て
くけくく座敷の座敷又お公に於て女給
形座敷と云ふなり是を凡そと内膳正位
神使たる形を以て神使の形を以て
以て以て以て以て以て以て以て

此方知不可逃矣すり 郡之邊ハ種業と
り此是は是ハとやと 冥の橋中へく
ゆくと思ハは是ハ甚長業ありいさ満
是は若御瑞城りいん者兆成ハと
一味の弊も滑り其後星崎加太山
甲山寺多室始りて夢想園の巻魚ハ
阿闍梨を執は形多とて死甚五月朔ハ
よりは山中ハ朝きハ佛宮ハ形類ハ一里
七百七百里を始りて七百小満す 然れハ
色を履ハくくハ又宮の一点小靈友哉
衆りたり 甚長は井田若宮の門年より

所馬廻の産多又甚長と名く 居たり
一 節多衆と名く 今ハ甚長神の
所馬廻神一人ハ中ハ烟中事
叶難ハ所傳傳始りて後丹波客入方の
馬三百疋いこくも一葉ハ所馬廻大勢
傳付らるる事ハ一と頻又形多向小
より 甚長ハ若たりハハハ不乃理たり
とて料是女匠當方の川お物ハ馬廻大
勢ハ此との二ハ三人ハ子ハ早ハ石抱ハと
云ハ 節多衆ハ井田より 甚長ハ瑞とん
すハ 若居朝日の方北右ハ八杖哉

内意我中入是一は唐存留心て
見義人信存をも進め一味せ一免
以却甚去部一正室前井の松平土左部
利長をも味方とて其外松平源十郎中山
勘兵衛一葉因平之部回平左部共四人は
林後物をもめより味方とせ又内信を
信之、流るるを号す大左保新部成保
義系も回又左部大賀源平部をも義物
澄らひ天竺諸藩の植付新之部と八安部
八部去部とくくくくくくくくくくくく
兼山中一官流能六島源左部八部去部

号は四部三束くくくくくくくくくくくく
十部去部唐存は人質とくくく其由と唐
君れ所方一義くくくく一並た義くくく
内信之と源くくくくくくくくくくくく
くくく一之世より一附部三束物くくくく
其上母居成永くくく在寸回一きと御書と
認め石川誠去部植付新之部天竺諸藩
内義甚去部林後物け五人の一方より
是くくくくは是より唐存之二の味方
くくくは是より唐存大義は唐存石の
内信くくく一強州くくく石川新保の唐存

頼三其由被殺一今身八今川義元
對面せしも 廣忠君所切少といへとも
足量貴物之入は猶も武勇の相おこ
志こそ 頼明は論らせらるゝ一八義元も
大は悦みれ 實は英雄の討死にと仰ぐ
とくくぢ 又足量の程を識人と仰ぐ
此く招きせし物論せし事なり

廣忠君三州年呂所入城日 吉良西條

所城日 依定要盟之事

今川治部大輔義元は 抑々廣忠君を
招き多し 其意を感ずるも 今英雄の

意して 其志勇極なるは 是國東と無陸
す 戦人之と 感祐斜 下は 三州年呂博
は 年東今川家の持地なる 廣忠君
を 招き 彼地の後 坐す 是等
を 改丸う せん と 所家人は 云は
ち 東三河武方れ 大勢活く 年呂
乃 揚へ 遷し せん 是 天文五年
九月十四日 躰所家人 小出元金 於 是
叶 たり 是より 是等 戦 事 人 事 當の
中 小 出 元 金 事 派 々 云 經 小 出 元 八
軍 勢 敵 年 呂 是 德川 義元

ナクは我命令ニ通すといふも其後
唐忠より也を記す者も云へり
善代随一に申は我の陽順一吾我
言せざる極又起世文と言ひ彼亦
示し合せり味方け者唐忠内也を
防一と計畧一太保新公部忠信
平重忠負源部只弟八重基言部詮実
林重助大系た道重の惟宗成源命詮系
と我仔細八幡の社より集寄し置せりハ
我亦乃爾入道殿の位を擧り他亦乃
輔佐一と改と沙汰する所又大元と云

所治其子源七、大元と名はぬ、大元と
名を以て罪せし我、我の悪名を以て、切かの
之人を過か、仔細神戶、近所長と云
今又孫河の今川を以て唐忠と人算して
入道殿を歎く、是、今我棄らんといふ
おとくは、唐忠は、不存大元は、不忠天地
神明の惡を、擧ぐる也、け、道重とも、何ぞ
尚志一門善代の由、大元、元、た、く、き、き
今川、内也、一、是、等、と、改、ん、と、ま、る、は、
不忠と云、一、各、は、不存不忠乃
唐忠大元の味方となり、入道殿より我

川一 其可好やまを中々是は一因
入道殿くわん 浦うら せは 詔みこと 之君を隆
今川家より内包するものなり 此は
四心也しよしん 一と云ふ内総心是を中各
今いま の朝儀あそび 多おほ 事は大義だいぎ 一 味あじ 在あ 意い を
云い 下した 途と 入い へい へい とも 親おや 津つ 文ぶん 士し 教けう 澤たく 也
一 入道殿 冲安心おほしん の為ため 所ところ 用もち 又また 包か へい へい へい
砂すな 料りょう 儀ぎ 又また 牛うし 玉たま とと 一 社やしろ 禮らい の 旨しよ 小こ
々々 一 之これ の 事こと 也 止とど 難がた 々々 也 思おも へい 今いま
是こゝ 非たが 々々 一 聖せい 朝てう を 書か ぐ 血ち 判はん 一 筆ひつ 色しき 八
内うち 総そう 心しん 大だい 又また 收おさ へい け 後のち は 此こゝ 之これ と 志こゝろ の

一味と心は内分の意疎隔なり

廣忠君是時冲備攝之事

其年このとし もも 天文六年 丁酉 廣忠君は
之これ 以もつ 國くに 年とし 昌あき 陽ひら 々々 新あらた 陽ひら を 迎むか へい け
皇みかど 降くだ りり 也 山やま 葉は 代しろ 元もと 昌あき 々々 一 年とし 也 一 者もの
家いへ 也 月つき 廿ふた 九こゝろ 日ひ 小こ 大だい 久ひさ 保たも 長なが 身み 八や 八や 大だい 原はら 林はやし
御ご 座ざ 未いま 記し 禮らい 文ぶん 八はち 喜よろこ 々々 一 要もと 盟めい 八はち 神かみ の
法はふ 々々 亦また 可たが へい 我われ 々々 累かさ 代しろ の 之これ 君きみ を 捨す 々々
之これ 道みち の 内うち 儀ぎ 又また 瑞みづ 順のり 々々 於お 此こゝ 理こと 也 一 者もの
也 一 者もの 也 其こゝ 耐た 大だい 原はら 也 迎むか へい け 々々 一 者もの 也

善代のこと者我補佐一之通の運送を
 淋せんとし、神の答ふこと、文小
 終つてきよきすとくは皆ちと同心す
 由縁を頼も大に保、又中、心えり、いと
 又七枚の二、女一枚起世文とく、

 分り、針原はもと定八起世文と書せり、後毎く針原と書
 針原はもと定八起世文と書せり、後毎く針原と書
 針原はもと定八起世文と書せり、後毎く針原と書

 其後、河津八郎、同志の書、中々、
 八、松平、前、人、佐、十郎、
 一、藤、原、氏、
 二、の、方、
 三、は、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

安くと、是、
 分り、と云、
 同、
 佐、
 中、
 清、
 女、
 水、
 若、
 命、

其上累代の之君を歎く一弓を以ては
天命人運小背く可なり。内膳我
追致し、廣忠君、是等、仰、所、城
守、中、さん、と、思、ひ、申、す、事、也
回、り、寸、志、履、く、と、申、せ、は、人、是、也、
廣忠は、我、錫、之、内、信、は、叔、父、也、
曾、深、す、人、也、水、さ、り、た、廣、忠、ハ、心、安
徳、川、の、守、統、也、
各、忠、義、の、志、也、
我、等、少、卿、也、
廣、忠、又、川、邊、一、帯、は、乃、國、入、道、致、思、也

可、い、く、之、可、信、者、は、形、亂、と、被、露、
亘、州、藝、海、入、湯、す、
廣、忠、未、所、知、也、此、在、
關、州、有、是、入、湯、也

其、留、也、と、計、り、此、城、信、也、
城、門、の、邊、と、も、と、御、一、千、石、信、者、は、
湯、信、と、部、た、り、大、左、保、大、原、城、跡、林、
八、面、宮、大、又、收、ひ、け、中、年、呂、也、
廣、忠、君、所、也、入、在、軍、云、大、場、接、く、
是、等、一、也、一、並、扱、也、
一、人、の、事、は、是、等、一、也、破、軍、兵、也、
招、入、也、大、左、保、利、公、仰、回、古、仰、回、治、也、
回、持、也、廣、忠、公、仰、八、面、宮、六、部、林、跡、也

此は島崎城内に入居たり此時此友は
石川儀理を長二男を養ふ所利
回之節宗康定見事新編神其の軍兵
十餘人より守り居たり大友傳を以
城内は濃邊居たり一味の義士とも夜半
不多に祖討を志たり大友傳石川見事も
大に驚きと流計しし討死し其金の
妻も或は討死或は敵を交偶金助の
者は赤澤より柵をたぐ矢被官をくり
流し望もよく逐失きり此島崎城と
あくと亦此分もは廣忠君の内通とせ

此信正郎之由定次是恒百金人と百具
一合志をなすくお運天此信正と人
又古郎英松平他十郎おもおはし橋井寺
まて参り女月朔西暦三月十日大坂陣前大坂陣前に討死す
廣忠君は島崎城へ入りての一無之忠告
は一寺院所一發也魯代元は中道と
て新来の奴僕とくく悦勇も事
限りて以信正郎之由之人の靈を
お還せしし所瑞穂とくく不思
なりと皆人奇異の思ひをなせり此
切石の御刺掛を場りてその家此

規挿せしむ

今自入田成忠臣を比類し我
以田地方十石費文にて有加増と之
於東代不て有お違ひ仍白也

天文六十月廿二日 仙松丸 籠押

八國甚る後

大ニ保新の家後

成瀬又立家後

大系江を家後

林後 柳後

斯く石川早節 藤原所使とて 張元の

方（も）是等 印 瑞城の 事 我 告 へ せ 也

内 腦 心 儀 定 確 し 未 之 事

廣忠若同族所瑞城の事は元軍忠臣
致せし一所一殺所家人は自死と云て
破我流り内腦心儀定よ同致せし事ハ
自今肩我流も我流とて世を辨し
其有我流者一と云計れ 廣忠若は
是より海傍大森と評滅し一治内信を
信定、橋井の館を攻治んと所人極を
信定信定も今は力をそく防戦せん
樹たは是は首をのし流し未せんとい

思ひにぬ老父道園入道殿を頼み偏
士乃、罪を謝り、あつちへ入道殿を
懐く。廣忠君は信之助余の事、城
頼より、廣忠君を問ひ、曾祖父
君の信遠君より、是非も、父信重君
喪心陣中、不慮に大變に遇ひ、
令位之、漸く信重君一味、信重君も
歎く、（四） 敬況も、（五） 敬況も、
象も、川か、（六） 敬況も、
い、不共載天の徳を、
其上曾祖父君を、（七） 敬況も、

披露、（八） 敬況も、
明、（九） 敬況も、
大、（十） 敬況も、
大久保以下忠臣有志、
如願安堵せ、
時は、
首を、
幽恨も、
形、
古今、
志、

形制一、理の南越たり重く中一き
之業もや、進入道素論の語改、
傾き、冷や、親老生、子貴、首劍
ら、我利居好、見守せん、事心、
形、は、先入道、首切、後と、心、
ら、一、と、海、と、女、欲、終、
余、痛、愛、也、母、一、石、中、心、
向、と、忍、免、以、事、は、入、道、
終、い、今、内、強、心、知、く、
事、一、と、号、心、力、一、
出、我、血、彈、一、

謙一、聖天文七年、二月廿七日、
痛死せり、又今、有、三、の、忠、物、也、
出、く、加、意、之、誓、貴、以、り、
翁、人、信、存、十、部、之、部、
信、存、十、部、之、部、
改、事、一、
其、後、感、深、感、也、
改、事、一、
其、後、感、深、感、也、

按す、
阿倍部、
定、入、道、
事、記

阿倍部、
改、事、一、

阿倍部、
改、事、一、
其、後、感、深、感、也、

安洋殿表心所横死と天文元年乙未
三月廿と其年星吟殿は十歳と
記一十三の山付鉄鼓河倍大氣四倍とて
伊勢山所浪人たゞも神ノ山と
所載年天文六年拾五の所載
後河山ノ其年半と山天文六年
十七の所載是也山所載
其記は是也山所載と天文六年
六月廿五日と記すたゞも神ノ山と
是也山所載と天文六年とせば天文
元年十歳の所付より中一年を漏て

三年目小所載三ノの所付横死と
なり大成記と河倍の記よりて記すと
いとも其年月は天文元年未と星吟殿
十歳と其年河倍大氣此若君と
与漢一強と伊勢の神ノ山也色回
小丙申の年星吟殿たゞも神ノ山と
より遠州掛家たゞも神ノ山と家小
百五十日中後と也後いとも其年の
地方色一ヶ月を軽と同年の冬三州
半呂の場入是と也その翌年天文
六丁酉の年星吟たゞも神ノ山と

所年四十二才なりと云ふ所書とも云ふ
所帰場は天文六年記す不問一巻六
四十三才如一事は時分々一由山
より所父君所事を一後中一年を
滿一奉如一原書は阿倍の記よりて
十三より所歸へ歸るを記し六年と云
十七の所年天文十一年是所帰場は
是古書より粗録すもの之今著大如記
家忠見紀より録し原書を改たり
大如記
大如記

織田信秀安祥城表月 右馬物長家

討死之事

唐忠君所帰城の後はいささか所切難と
しとも穂信の如く云ふ武界末形再發
足(後)は中一門美氏の法士以上事
浪中各忠節を勵む所不 徳川家所威光
再々北池田家(海系)より之河士と
又云帰り 徳川家(帰順)せんとするもの
多かりしは織田信秀大に誓ひ其系
の討死をすは是(一)と云ふと名氏大軍を
伴一之(一)士との眼を名氏を織田もかの
威風よ切ひし一めんと天文九庚子年六月

六日大軍と發し三別安洋の場を
攻圍む此場とは親忠君の所七男島崎
長家去勇士等もは少も退屈せし
城兵捨降し矢石を荒くして防く
いとも寄るは大軍城を少くして
やうとみよる廣忠君少石安洋故
くはけしと浦と菟井の松平彦部
中卿の松平初紀忠次岩谷の平兵衛
彦忠林益内後兵衛小川上知
松平源次郎佐藤を大將として安洋の
加勢小巻八さる物と源次郎馬つははき

進出す城門は入時候もを幸と
寄りの大軍攻圍む城は左馬助は佛を
見く門を閉く切くお歎味方へ
力戦し退く左馬助と始源次郎基六郎
林内益内益小思ひく討死し城は
其位も再ら向くと見よる彦部初紀
能捨降し海兵衛彦部八巻矢石を
とけし放ち防けは減回勢も攻りて
佛を老目く退教す

竹千代君所送る所母君難別之幸
天文十年辛丑正月三州川原の城に水攻

女房の女史忠政身を以て廣忠君の
小の方と定給ふけは所父は所君始は
松平洋定身の昌安入道女子を以て小の
方と一のいふるに似せしに新別よりて
喜木能後身貞宗の女代定給ひし内後
廣忠君を定給ふけは小の方先給ひて後
水忠君の女史忠政を新別せし喜城西て
小の方よりて身代賜給ひ此小の方忠政より
おそせしに定給ひし女を以て今女
廣忠君の小方よりて是し之の世に
阿信酒井石川より老給ふ計よりなり

聖天文十一年壬寅十二月廿六日若君山誕生

石川安重身信忠六墓同我段阿信大氣

定吉は竹刀の段なり大藏記には酒井能兼地心欲地刀段

竹千代君新より此刀信忠より横目より信忠記稱一尊侍此若君

御誕生は時辰は奇瑞なり新より此刀信忠より横目より信忠記

三州鳳東寺峯の蕭疎小土神の儀と

二は交金別菩薩招杜羅大將林の神三は

武尊賢菩薩真達羅大將神四は

征夷大將軍經一位大政大臣今の世より光
 神宮と垂迹一法は則け若者の
 半輩之御より此若君之の所付天文
 十二年甲辰丙申若君離別りその也
 いとつて十年辛酉此神忠は卒せらる大正十
年
 二年癸卯七月二十日此神忠故
 年此名大漢賢神とす
 減田信秀よ志と無をわくくより廣忠御
 我今川の無力より一信秀又一味す
 此神と縁を結らんる南無よ首ありとの
 思言ありとく此付北方所病ありとく
 酒井清事此神親とせよ止と承らせとく此使

此の世迄は河津神宮一傳らせ給ふ
 とく所母子此神也哉歎と此神を理
 こくく名せしめかくく此の方は清なる
 是縁をわ給ひ外屋よ此神今國忠命
 正祐阿倍宗部と此神宗元其亦十五孫人斗
 此縁せよ大正九は全四葉孫明之と此神は此編年小
正信今由茶清四言文と之は他高要よとて此八部
正縁六世三孫此縁天交十五年此縁此方此は此縁
上此の場故に此縁天交十五年此縁此方此は此縁
 此縁とく是縁と外屋との縁と此
 此の方此縁の人とて此縁と此縁と此
 此縁とく此縁と此縁と此縁と此縁と
 此縁とく此縁と此縁と此縁と此縁と

こはいつと申す所心くくは定よりや
是海風よりは路の能能響あして刈面道
送らずとせしこそはつらきも是遊心依
中へと申す水の方中石やとて又見ゆ
能は大方ぢぬ能人の人ぢきは汝は刈屋
まて到つは一切の捨らき又六巻を切
進致さる此両指をはこつらと一左と
可んとははりとはこを能く見の可
端さし竹千代是海よ預一はあつて是海
人て我他人とは思ひて去りても汝は
り種もあま謀せしめんは竹千代は長の後

是をさくり地を恨むる文源くく
り中夜と竹千代と叔姪の可きは終よ
和睦せらめん汝も介謀せしきは吾耐
和睦の好とせし思へは返すりくも
汝もとも返一左と論とる可くも
室へは金面阿倍を始山休の人ともけしは
佐吉維とて小川順の農民十五人等
けし中夜と刈屋と送らきも能く中へ山
中へも於てらぢし人へは山に居たり果して
刈屋とて一御沙流を細し居たり果して
刈屋より言末吾等御沙流水地を御沙流

と始二十人斗一内道よふり々々皆馬より
飛り行雲の首の端端一々是ははとて
是等一々の四道の者はははめや也存せ
同考士とは一に新教せし殿の位よりい
とと羽織を被るははははははははははは
若たり小方少石等より送るの者もはは
郷民共々雲を降一老列を也川五奴
今相は是等より帰る者一々一と
はははははは若連の者一に新化更の
この少少云々一川屋の者古八新ては
ははははははと其は門異をカ護一川屋小
はははははは

隔たり言木水此西人此はは信元の家人
あり一、後のは 所南家よりささる相
其ころ此小方井水若は三別形原の松平
親伊也家廣の妻より一、廣忠若小方城
少難縁より上は、家原も其ちやみの人小
縁縁きよ琳守とと 是前若原、送那
さんと士若より是恒中宮十六七人休せめ
外屋より送る一不伝え大小怒送るの者
一人も残るは琳一たり此時に其の廣忠
若の小方は女婢せしむるを名猪の母若
親師し〜いみ〜き山思ふと世一人

少少、く、後、道も感歎せしと、是、是、
後、は、傳、也、院、殿、容、若、光、岳、知、光、大、姉、と
す、り、し、所、方、似、り

竹千代君所見、竹千代君母、竹千代君、
竹千代君の御子は、竹千代君の御子は

所、男、子、と、人、所、女、子、と、人、あ、ら、う、と、皆、
竹千代君とは、所、後、整、へ、せ、う、ひ、な、り、男、子、
所、元、始、家、と、中、々、所、是、は、山、陽、の、腹、心、也、
始、し、分、也、と、山、流、又、鏡、也、と、也、
竹千代君所成、是、の、後、中、所、成、ら、し、也、
定、ら、し、也、元、腹、也、と、也、元、と、名、也、と、也、後、也

庸、元、と、改、ら、し、十、三、の、歳、より、是、是、塞、く、
以、安、け、り、は、生、産、院、所、と、世、交、り、
治、り、は、所、も、知、者、也、と、也、
癸、卯、八、月、十、日、逝、去、阿、ら、う、と、心、光、
傑、傳、宗、英、大、姉、と、婿、り、し、也、所、女、子、
三人の内、多、却、始、と、八、橋、丹、の、松、平、
無、市、忠、心、也、と、也、
没、後、は、忠、心、卒、と、也、
妻、よ、定、り、治、り、伊、豆、也、也、
忠、頼、と、没、後、は、忠、心、也、
心、直、と、婿、り、心、直、と、也、又、二、男、一、女、也

援のいひつかさく遊欠迄と山段の疾
痛中せりは遊月迄の長附榎村新布

平場も備前と云く講と定り成るは榎村重お仕す侍

以大三河志永故とす榎村重と故の父お仕す侍

と云く 昌介と云く 妙術を以て八河と云く

但上(下)返一候也る 軋場ノ底(妙術)

公重ともあるとも但も故もす 其長松平

義人佐藤量も回一くお仕すると云く

不(東)より一々 経有る也 一 徳宗

高声よ 新六其歌を放す一 佐藤徳

より(新六)一 一 一 榎村せり 是ハ

大事の故也 是は放す一 一 榎村と云

新叙 榎村と云く 榎村も力なり

一 一 八河の力は榎村と云く 酒は

酒は榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

榎村と云く 榎村と云く 榎村

所家人の由法武切しき号たるを
加へらるる事ありとありし利便にて
真高と号し其子忠八部も酒に才あり
とほゆる事ありしとありし
所編に増谷と云て名六
多すといひたり
八部と云ふは明之又大藏
八部は八海津西の利害とす

酒井將監忠尚返致す所入依者改易

(之書)

廣忠卿同吟仰稱城以好は松平一人
位者は云よ及り其余の切長大藏致節
成濃又右部大原左近右衛門林前助未大小

時を増たる其巾小も所信大系ノ定吉
石川安室有酒兼酒井雅樂助正秋の権威
肩を重なる者有る事ありし酒更兼人
位者雅樂十部部一席存よ右文ノ少佐
一は此酒酒井將監忠尚は熱願ありし
我こそ執権の威勢哉と云すく此小
庶儀の雅樂助却て権威を云ふは違ハ
其小知と云ふ事口惜く思ひ何うな河信
石川酒井未の之失を云ふ一罪負せんと
謀し、天文十二年甲辰三月上旬忠尚は
大原左近右衛門村竹昂を回道し

忠尚の宅城——大久保新八郎廣瀬を頼と
 以てして中上より酒井頼宗助石川
 安房守小松盛をよぶ——と君を愛如心
 忠尚も亦此善代の所家人を海を東
 之礼州道の妙法を打中此也——と所也人
 一回小恨と名者少く——は是國前常礼の
 兆之聲より先彼亦又後を切て治ふ——と
 中々廣忠若少石善代の女小松細の
 事又恨と礼——情事亦又害心を授け
 家中一掃動の基なり予く私の宿意我
 捨く——と君又忠名を正を切ると

双方和睦——水魚の交を治ふ——と
 作々もは忠尚力なり退出せ——と是より
 大原介村亦と治ふし内一坂道の儀と
 合ふ——此言忠尚と長尾有忠尚と大久保新八郎廣瀬は此は忠尚の
 合ふなり此言の女小松盛なり新井若菜の女は忠尚の
 親なり此言大原忠尚は是國前常礼の事なり此言大原忠尚は
 改めり是より中上は織田方は一様一たる三州
 上和田城に在平之兵の忠尚大久保新八郎廣瀬は此言の
 大原忠尚なりと回を——忠尚と役採りん
 とす又回國若海郡楠木順を在平親
 任存也自松盛とす瀧者大方なりん
 岩はの在平右部親也としは長尾若菜

よくも威権するも人とは不岐之其
也ハ秀人常々懐を合々其秋は
涌せと云ふ誠之君を執一なるを父大前、
執事一々も家人れよ付する事、
職一々も大前けり、城守も大は暇み
りも其秀人、其のよいつる事、
あも一々一人の不言をもて人の
順代を言即よ奪ひ君を蔑如ま一々
も、
此定去我誹謗するらそ色帳
や、
思ひ或付酒井雅樂助石川書
極付新六郎、
以下信玄の事を扱き、

何とて思ひ、
橋邊日頃よ、
こそ又、
岩陣の遺順と奪ひ、
をも押順、
後又たり、
一々も其身、
逐て道心と企、
多分、
唐忠君、
一々も、
橋邊、

君乃為國の爲也、
追放一彼、
所遊去河、
唐忠君、
計畧有、
酒井、
ととの、
備、
可ん、

天文十三年甲辰八月廿百遊去河

とて、
悦ひ、
二本、
其家、
多、
愕、
何、
尋、
是、
唐、
水、

三年卯八月十日の事
三年卯八月十日の事
三年卯八月十日の事

三州清繩子の海理河原軍三年

是より先天文十二年十一月夜中一徹小
減田方より上野の地を攻め河原次七郎
回帰はる能防の敵を追拂ひ口感と
崇徳の味方天文十二年甲辰松平三郎忠房
減田方は一徹一酒井初重忠尚も心と忠房
合せ是處を討つ其れいふことし忠房
之軍所一發を以て佐治の地を奪ひ
老領是處へ移し居せし松平内膳忠信
今は又死し東條の願を松平喜多郎

義孝も死し其上此八月廿百乃國道
敵も敗るる事とゆへ湖田信秀大軍を
岩向より三州碧海郡安祥の地を
攻め一昔子三郎重信廣を八重山
佐治の地を攻んとす舟楫之難と忠房
織田の大軍を以て包むと志とて
信秀の味方とすり是處を侵奪ん
しり信秀大軍を以て湖田の地を
海理河原の地を以て軍勢之を又
上和田もはるを捕り忠房も守りし
三州の事
父は信秀の親戚と云ふは能くは信秀の孫なり

酒井將監忠高も上野の城を
在るに忠高は無力に於て是時益發汁孤城と
て亦聖天文十三年己巳の春廣忠高は
安祥の城を瀨田の方を奪ひて一城
安らぬるに安祥矢矯川を隔て酒井
に合戦し合戦し歩留るに安祥の
純多も至んとす任承授兵城をす
益發對我度川九曲し大久保部都
忠高十言を初陣し之款の竹大將と對衛す
叶忠高は後河原守忠高と名をとり又忠高
去るに忠高之扇の所馬下と云うけ

酒井も討死し其い酒も益發の
君乃古より永きり
叶高の所馬下益發の城を平し忠高
お度し忠高討死の後若く平し
此頃酒井の城に入り酒井將監と名を
酒定も上野の城に入り酒井將監と名を
是年上野の城を白くし酒定酒定を以て
酒定は酒定方大小牧軍に陣村あり
酒定大久保新八郎忠高提上り酒定若
酒定酒定酒定酒定酒定酒定酒定酒定
十三年九月六日酒定酒定酒定酒定酒定
酒定酒定酒定酒定酒定酒定酒定酒定

星野勢才流たり其以星野の士津丹
廿六と云者有り天文十六年丁未、義人
信友、星野を叛—後廿六、喜又謀と云
唐忠君と執—采地、の平書、
—義人—中送りける、義人少く、
唐忠よは恨む、若大義を刺殺—
其下、^は知りのの折、
廿六は、大義を討たは、
後、沙汰も、
其時は、
—は、廿六、星野を逐電に、
切も、

之は、
一、
大軍、
か、
君、
彼、
甲、
勢、
勢、
固、
尔、
始、
其、
任、
始、
其、
任、

恨と事源一可も色瀬の意へ物任せ
やとあるなり 和歌と我は甚著断念の
交りす若甚上の勢を去りて冷りしは
御田忠へ推尊哉勢を去りて冷りしは
~~~~~たり 之は多八無日より 是時元六  
一人も引首思ひ一折る平定初  
中て成ると少多事し言ひて暫留  
~~~~~浪ち 此後は平定初と後心の  
味方と頼み日夜傍を離すは是時我
改定軍誠多細又話し我号候と
~~~~~其化一命不願す~~~~と 御田忠

少許河まは思ても今自忠義人小は  
不願加意とあす~~~~と思よまて  
平定も今く此方又今向くは平力我  
~~~~~人号候の孝内と 心入る 別従の  
程は知透~~~~とはむ計のよ安る
~~~~~事も切けよ~~~~は之候つは候ひ  
心を~~~~ 親睦こそ頼ける 天文十六年  
十月十八日の夜宵の程は覚と昔酒飯  
~~~~~ 例の~~~~ 軍源をこら~~~~ 夜を  
~~~~~ 更~~~~は忠倫は忠市入り 是も  
其道初と目~~~~は忠倫は忠市入り 是も



竹千代若人質之事

榊原之長子忠倫横死の事 潮田家臣を以りけしは潮田方は力を尽し 是等の方ハ勇之競し 洋心忠倫亦は是を以て事不怒り 此上は自大軍を以て率し 是等城攻へしは人殺を厚く此等 固給へ少くけしはいふは是城防らん軍誠中 成可又是等の老長亦苗裔若年よりして今川忠一様此等は後州へ援給と 清後い然し一回より石川忠重 天正其等つ所使しして 記 今川家加勢を

清後い 是幼少節 幸の茶大和和尚 子孫森然 徳正成時 大和初若宗主雲無 是子 前九法文 是次より 徳家すもは 義元少くれば加勢のるは 必相及 遠州勢を是に 一 去那ふ 徳川家の事は 終へしは 小 以てはととも 苗世れあり 軍中の法武 中身は人質と申す 一と 返言あり 之者忠若此由ゆ 百歳元のいし 一 訓 道理を極せり 人質をらせん 一 竹千代 竹千代若人質 六也 一 徳家と天文十六年 後州へ送らせしは 伊能の石川樂七和教心 天正六之物 伴家記 徳家命 三和之 徳家 上田若宗 今川







後をたどるも、知り得らざる所也、  
然るに、一とて、織田信長、ハ、  
無千部、信長を、  
竹千代、君は、信長、  
於て、は、今川、一、  
し、中魚、  
し、  
所、  
我、  
小、

軍を破る、  
す、  
物、  
思、  
思、  
我、  
一、  
思、  
神、

彼者も無事無事一々之云ふも好く其  
之歸りありと申すは任事一はは  
情けいしとも廣忠君の以重波を感  
今若 竹千代君を報言せば廣忠君  
遂に味方とはぬかす物重なるに  
終るは子の恩愛より其味方より居せ  
ゆも五一と其後は  
竹千代君無徳千代古く尾州名高方  
天王館小石城に御番地なりし御  
けり

之州小豆坂軍之事

かりりとは天文十七年戊申三月藏田佐秀八  
之河を并吞せんと大軍にて押寄りし  
ゆへは是を弱と多せし今川義元遠江  
東三河の軍勢加勢とて其白らぬ大軍  
大將は駿州陽浜寺の雪村和當副將は  
胡比奈佐中將と春能頼朝は朝比奈小太郎  
春彦秀忠部太郎三束長教を大將とて  
白く其軍勢を其河に引寄せし今川  
けきは是時より其河に引寄せし  
所本軍あり 徳川今川両軍の勢  
今切取坂に其河に引寄せし二日



平部忠朝佐實田原次郎佐次之赤川  
去在東の赤川市也其の地を以て  
合戦以て尾州方内義家朝少能敵を  
討つ川尻共平部後醍醐天皇の方作系其  
能く首を將たり其の討つ方遠近其  
重宗名護風係平部より方中は力戦して  
討死に湖西方逃一の吉徳武敏之佐入道  
小瀬修理左史也此川河竹助左衛門能経公  
延年大久保忠朝宗忠小久命と唐芥小  
比々々公親に討つ油油は之の戦も勇力を  
取一けきは時の人今樊噲とて中ける

此時今川赤の軍將朝比奈小太郎春美  
一番の地を合す 徳川將も今川將と  
戦ふんと先多々をみれを討右を破り  
湖田佐廣と追崩し之を追ふ之の  
今此敗軍の勢も佐廣の旗也一  
崩れりりける程も旗も掃えりり  
盗取り近川退く此時より津田源次郎  
佐光織田造爾も先佐房是田物方也也哉  
一書 佐々平人佐信通其合背 津物 備之  
中 此 為 知 利 時 十 七 人 下 方 源 次 郎 一 匠 能 一 年 自 進  
討 十 七 人 一 百 五 十 親 と 近 人 合 進 東 今 川 源

一、飯と港と合を教くは高きたり其甲  
も源之部造酒之元は今川勢の中  
此へて金と惜しむ事我へは文の甲  
此兩人は戦さるるを云ふ事と云へり  
回進戦今川勢は七人又高きり  
姑く松徳を將す河田勢是之我  
將く二の備すくち返り河州  
常高小豆飯の七勢と世く高きり  
備へしは是七人のうちなりけり今川  
河州勢熱坂軍と見へり  
徳川勢の中より松平左衛門尉の佐吉也

傳十年佐勝林蔵之部忠満小林源之助美  
以下横合より逆入り河田勢の馬井清徳  
平首りけり切て高し河掛左衛門尉を  
高し幸と高き苦戦し河死すは時  
河田勢も河川勢も若干討死し高野  
之部も是を云ふ河州勢は被たると  
是と港を以て攻むと云ふ事なり  
高き河田勢も河田方其物に港武蔵  
之佐と今川方小倉世物に河川之佐  
たりしは物返す之佐高野軍軍  
川と河川は河川河田方小倉左衛門

軍を返し〜上和田の城へ川邊に其後  
津田藩之部佐光と上和田城とを安洋の  
城へは津田之部之部佐廣城跡へ是れ  
佐秀ハ尾州と稱し〜此合戦初夜ハ  
津田方の勝後夜は今川勝けきは軍ハ  
年角と刃〜津田方は芝居を乞  
ぬ今川方の勝とせしは評述〜は  
と〜和形〜尾州跡を返〜後雪鉄  
和尚と柳比奈備中も森能く姑〜小  
澤留〜法華沙汰〜其間小  
大樹寺小〜寺井由緒哉尋々〜

勅諭もた〜事 明〜知〜也〜事  
其禮文は  
大谷知恩院末寺成道山大樹寺事  
録卷上人為冥基松平一門令建之  
至于今當彼地跡尚存寺玉卷之  
地彼遺之切再興沈沈其妙也  
今自為末勅諭寺冥勅額事  
彼執申者也亦不彼致天下安全  
延所者 天乳也其意之以此  
十二月一日 控在少毎正判  
大樹寺修了文

南入星を汲見しし私營の寺院に遊  
を根籍を戒しし又連判の北守  
其文より

大樹寺之事勅額不し六為不し  
南末田富臣勢詞堂以下四題云々  
お違ふ也 右中興殿字は廣造也  
也く滑る

二月廿日

佑中守春徳正判

雪頭

主判

魯耕流卷之七

雪頭初尚も春徳正法事沙汰し終り

けは今公の將軍と候し法軍勢我  
川邊邊所隔りけり是處方は此我  
大勢討死し今是とも武威は深盛小  
なり帰順の事多かりけり

三州明大寺村合戦討死

之書

天文十七年戊申三月小豆坂乃合戦織田方  
少員たりと候しは織田方内を  
候は大小懸ひ及敷共なり又極井の松平  
内膳心法定子多し法定より法定は  
天文十七年三月廿日合戦  
先内膳心法定也此と以て唐忠石切年

乃討進也一と云うて是等一宗押順一を  
忠義比所家人力哉つく〜〜座忠若を  
是等一宗一と云ふ也た其長徳定改  
流をら〜〜と云ふと道同入道殿を頼之柳之羅を  
謝一例首と徳也〜〜と云ふ〜〜天文七年  
十月廿七日病歿す可〜〜信定之弟と徳〜〜  
父乃羅と云ふ〜〜も終つは安徳  
〜〜思ひ去信天文十三年も上西の  
城〜〜叛逆一討負て源系一橋井小  
磐居一つ〜〜今も其人信若も叛逆  
酒井將監忠高今村竹平大原良直を

等も〜〜失心と云ふは信定其叛心と  
前して上和四乃三條山中の松を  
等一棟同心一御田方肉色一是等と  
傾けんと故漢と云ふ〜〜小之はつ橋死  
せ〜〜け後大之権と冷〜〜人  
信若はいつ〜〜と云ふ〜〜  
信若の二〜〜園外と市丸我武威と  
頭さんと思ひ之五百金持と一二年一  
四月十二日三別畑大寺村にあり〜〜魚鱗小  
陣と云ふ大正保元山豆飯合戦ありは所山内小倉の地にてありて  
小田の如きと云ふ〜〜信若の弟一人は是等と云ふ  
か〜〜と云ふ事あり〜〜カマ川〜〜と云ふ〜〜將  
座忠若は討〜〜と云ふ



酒井新助助正親石川女爲子清爲よ  
二百金勢を以て就向りて、侍けし軍  
勢は敵思ふより大勢なりと陣を以て  
未幾と始めの序進は重く大久保  
新八郎忠徳喜子五郎重長侍石川新助  
正綱よりしりかきて精兵の討に七拾金  
すよりあり、唯大寺村の藪落より小堀の  
寫り代付せし先敵兵勝よりあり、此所  
より、遊軍は俄に起るる、討之と  
定らる、倭は討に在り矢步詰り、侍けり  
たり、佐方は是所勢を小勢と見て云と

進め佐方、二百金勢と酒井石川二言録と  
を合せし、戦ふ程よりあり、貞討死し  
あり、方よりつと、別れ人馬の息を助く、死  
去年より知し、けし、敵は僅の小勢あり  
息を、健せし、只攻まると唯大寺を歩あり  
曹山へ、言けり、あり、是所方の侍を討殺  
たり、事、重長は、俄に起り、歸波を以り  
敵を以て、討多し、死生は、知れ、忽ち  
四拾金、人討落さし、只、重長より、侍を以り  
大久保石川、亂れ、あり、馬を、遊、之、敵、の、中、小  
堀、入り、一文、字、より、け、破り、けり、唯、大、寺、村、と

叢生河原より切腹又水く返す一事小  
河津秋の前後より数しと對立せしり  
酒井石川も是より亂戦始二百余騎とて  
討つ魚も此時義人相打ちの民屋も  
火をうけ軍勢を引免らば是時勢とし  
事かゝるるゆへに後しとて人殺を引免し  
り也義戦しともさのみ勝利もさるる  
義人不忠の天罰也相打ちの可小使  
戦しんとせし程は是時勢二もなり前後  
より矢倉はくくく<sup>附</sup> 祿立たり義人方  
は對立はかゝり楯はな<sup>附</sup> 的なり

對立も同く戦しんとす是は四家とて  
道せしり義人の軍勢鱗のやゝ重なり  
先子たるりハ戦しとて後陣の勢は流し  
徳の勤と味方れ兵の曾の濃汁誦居て  
ては業よりなりけりは後陣の勢ハ  
刃と搦くこゝろと也しと先とれ勢は  
對立く勢は是一足もを辨れ急な大勢  
對立し得其時後矢倉より大將義人  
左の前後よりなり矢倉より對立したり  
義人志しとて對馬より志道しとて  
前たりは上田兵庫元佐を首とせり

是時勢を思ふに、不徳の示すは、  
義人は大將討て、士卒も好む、討たれ  
難く、乱れ、民家村壘、進入、垣を破り  
薙伐、くわい、金汁をぬり、もつ、或は  
日比、言名、武勇、よ、こ、保、徒、も、難、人、の、心、小  
かり、討て、者、救、ふ、は、是、時、も、は、字、西  
の、留、好、う、款、意、近、去、は、是、時、勢、ハ、義、人、の  
首を始、却、し、首、も、百、二、級、持、得、り、守、持、小  
入、け、る、小、廣、忠、若、う、は、所、在、人、の、軍、切  
悪、感、一、時、い、ふ、中、も、大、保、石、門、切、切  
松、冠、た、う、と、黄、史、一、時、ふ、さ、う、好、か、く

義人佐者は、清康、若、の、所、在、我、ハ、叔、父  
たり、通、分、最、初、う、忠、義、を、得、一、言、ハ、  
是、時、保、持、の、初、は、勤、芳、あ、う、さ、う、一、若、  
と、一、所、在、論、行、他、と、う、保、不、一、う、い、ふ、是、は  
所、在、の、中、其、所、に、心、を、感、一、たり

山中斎城之事

室、又、三、州、山、中、城、と、相、平、隆、を、主、言、ハ、は  
見、三、は、ま、忠、備、の、横、死、と、口、信、く、思、い、な、さ、ハ  
不、叛、心、を、起、一、湖、西、方、内、也、一、是、時、と  
侵、奪、ん、と、三、州、加、茂、郡、山、中、城、を、其、會、衆、  
右、進、忠、親、信、系、親、戚、三、義、忠、能、兼、た、進、

子宮内親系おと始其力固く節量等  
之の親傳座患君少く之を改む討  
めは山中城の者有力城一親我  
失いし一記事之の押言  
改し十月酉井新事助正親石川  
女盛も清重大臣御命忠務親父忠務大  
弼也北大将之官常持押言押言  
身をも健以攻之けは城兵若く討  
防戦計雖く思ひ一夜中城兵  
海大多焼陰槍系と始し十九日  
清重之親官内其討張しは城兵

とも困道より控く一城失たす  
是を以て之を討す翌十日卯刻に經路を  
作り攻之しは城兵は人苦む  
いさ由是は偏川多せ討んとすもの  
成しは城兵は人苦む門を破らんと  
宗政令し君是は人ハれ思ひしは  
安しと山中城戦攻前一是は人苦む

按する原書には此合戦を天文十六年  
と云ふ大正深く淺く其年紀編年  
皆十七年とす今是は經史

うは四月朔日と編年には伝者如府  
合戦より後の事と伝佐孝討死は  
四月十五日也 彦博は七月九日

沖祖尾州警固(備)り けらば天文十六

五年より此年之卒竟は織田伝者

之長を横死を中より多々大軍を遣

是時を望んとしてけり

沖祖を質として今川加勢我將

小笠原北軍攻り其後伝者も相大寺村

討死しけりとは伝者も山中より

けり原書の色月には誤事

昔は人々其時を改む

伝者如云自是時西洋あり軍

竹本代若人質留之事

去年より伝者如は序此例なる

海に也然し一伝者如は重くせり

天文十八乙酉年三月六日齡女

くもさせ給ふ未感りよさる

少艱よりく心事とて思ふ

一歌も中家も愁歎や南方

くくくく 詮はけり下不注くも

大樹寺より一尋礼の

大樹寺松通の  
説は因に時海





降さるは佐廣城も酒一をせよ  
人營替すきはいくと申道佐長大小  
収いり進回をより十月十日尾州  
名古倉一乃村天王坊は富直左衛

竹子代君を返一中さんと長佐瀬田方  
うは減回を蓄元佐平因祐祥地乃佐業  
又佐廣を引海は乃は佐長と佐廣六  
大佐探針八郎忠俊回乃部七郎忠俊回乃部七  
忠也双方之州 equal 乃部七郎忠俊回乃部七  
此威乃乃是 呂海乃場乃箱乃一酒井  
乃部七郎忠俊回乃部七

呂海乃所家人はさるち氏中も

竹子代若所探針と佐いけり今川義元  
竹子代敏切年乃程は義元駿州へ酒  
法書一巻見す

竹子代若所探針十月廿日申す一十月  
女百子は乃首途乃 駿州へ到き

此山は乃天神之乃物平助七乃物平助  
乃乃乃酒井無事乃乃乃乃乃乃乃乃乃

内義元之出排示平七郎酒兵衛乃乃  
桂村新六郎経乃乃乃乃乃乃乃乃乃

宮河乃新波と撞く乃乃乃乃乃乃乃乃乃

福崎 大橋



歌謡 七位宮正資と自云く法事扱ふは  
む君の幸は八歳よりを終ふ  
是より拾九の所蔵中より續有る海にせ  
ら其言は申銀鏡中にも申あらし

伴米法師の物語に唐忠君所道云の時  
所家人評談に云く  
多紀の事天此甚き事申は御田方へ  
一傳に云く早く 切君御至せし先ん  
と云石門女宮宮酒井雜果物申は  
先代の山宮又経の令川一傳せんと云ハ  
二伝に云く一史に其申云く唐忠君

題名と申胡比系傳中にも是部宮系  
粉殿七のちを以て三音余神と云ふ  
と云く是傳に拾紙たり是傳元は  
是より是紙に云く今川又経と云元ハ  
群傳を集る今

竹下代は鹿州より御田より云を  
合せんと云く又御田信義は  
死に喜子佐長儀十六文なりけり  
我物語せんと云く大軍を記し是  
安祥を改前一盤回入る  
竹下代をけり川元一と合せし

足くたり

接すもよ原書には小豆坂の戦と天文  
十一年八月言とす大成記には十一年  
八月と十七年と二言して二新記は  
物とも其戦の事候いふも一回一巻ハ  
一事をあるとと誤年を隔て記し  
たることありしを志忠日記大成保元  
等皆十七年三月十九日とす今是を  
従ふ又志忠日記兼藤原集は是は  
安祥御政を二月十百也  
神祖佐廣と人集習まなり唐忠若

川續き原約を愛し終りぬ

神祖を續唐又婚り終ると記ぬ  
原書も是より一回一巻は尚も御年僅小  
安祥御政を十月八日と記す唐忠若  
如きは三月六日なり是は人集習は  
如きより一のちなりしこと如きなり  
なり又原書には人集習の事  
原よりより中東と記して併來英  
大成保元は雪映り林平より  
中東と記し今是より誤り終り  
原書を判すに

改正三河後風土紀卷第六

愛知県



1103266450